

意味や多様性を見直し、今後の本学会発展と我が国社会への貢献を議論し、次の20年、40年へと繋いで行きたい。

多くの皆様のご参集と、活発な議論を期待しお願いしたい（石塚悟史・湯本長伯）

【 進行記録概要 】

※登壇講演者（石塚悟史 木村雅和 小野浩幸 伊藤正実 湯本長伯）

学会長経験者から

※登壇コメンテーター（北村寿宏 内島典子 伊藤慎一）

学会執行部から

産学連携学会創立20周年OS『産学連携・異種異質連携を考える』

日時：2023年6月13日10時15分～12時30分 会場：高知会館A会場

1 開会：主旨説明2分 進行説明3分（湯本・5分）

（資料PDF）

<http://www.j-sip.org/pdf/01yumoto.pdf>

※上記URLより資料をご覧いただけない場合は、以下のサイトよりご覧ください。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

2 ショートレクチュア（SL）の部

（簡単な質問のみ受けて詳しくは後半のディスカスの部に載く）

前半司会：小野浩幸

A 湯本長伯＝（発表用資料）

<http://www.j-sip.org/pdf/02yumoto.pdf>

質問・コメント：北村寿宏

※上記URLより資料をご覧いただけない場合は、以下のサイトよりご覧ください。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

（講演） 簡潔に、4点を申し上げる。

1 学会設立時の状況と産学連携学への思い

21世紀初頭2003年3月に東京永田町・都道府県会館で設立総会を開き、満場一致で設立に至った。が、産学連携の実態は惨憺たるもので、兎に角は先ず『大学と企業を結び付けること』だとばかりにリサーチも無く戦略も無くあちこちを訪ねて回り、様々な案件を野放図に大学に持ち込むような事態が、各地で続いていた

その上で、産学連携推進のため大勢で研究室に押しかけ『従来の大学教員がしたことも無い産学連携活動への参加を強要する』狼型産学連携や、『産学連携活動に邁進すれば多額の研究費が得られて研究が一気に進む』と騙す狐型産学連携など、事後に悪い傷跡を残しそのような活動が溢れていた

本学会創立に当たって先ず重視したことは、『知の生産』『知の活用』『知の保全保護』であ

り、産学官公民金連携活動に『知のサイクル』を挿入することであり、その『知の生産』には異種異質なものの連携融合を根子にして来た人類の歴史があることを深く理解して貰うことであった。併せて創立までの活動、学会名称やアウトライン設計の他、シンボルマーク・プロメテウスの火や、メールニュース等のイメージング・ブランディングにも触れた。初代会長経験者としては、後に続く2代3代の事跡にも触れた。特に学会機能を持つ重要性（基本ロジック 事例収集・研究発表／DB化 整理・類型化・体系化・構造化 理論の創出）と、非論理的な『狼型狐型産学連携』からの脱却を強調した。

2 学会の創り方—陳腐から創造の連続へ／創造的研究議論を通じて体験知を上げ学会内で異種異質連携を創出 本学会は徒に前例を繰り返さず、新しい何かを付け加えて来た。

私が新しい学会に付加したのは、『シンボルマーク・プロメテウスの火』や『メールニュースの紙面デザイン』。2代目会長・荒磯恒久氏は短時間で第1回の大会を準備し、その独特の大会発表番号（発表の日時・室・セッション内順番号）は、20回の大会ですつと踏襲されて来ている。

また第3代会長・佐竹弘氏は、学会を運営する事務局の体制を重視して、大学内で問題視されないよう体制を整えた。大会・研究会の盛り上げも学会立ち上げ期には勿論重要だった

3 外部異種異質との連携融合積極的に創出＝異種異質連携を多角的に創出（外部連携を創出）

各セクター・組織・団体との連携協力、JSTやNEDO、経団連、商工会議所、中小企業関係組織等

4 異種異質の醸成と発見（異種異質は当たり前ではない）常に多様性と独自性を意識し活用する

※併せて学会創設時に創出した知的財産として、シンボルマーク『プロメテウスの火』、及び『本会メールニュースのフェイスデザイン』の設計概要が紹介された。

（コメント・北村寿宏）=>学会創立時の様々が紹介されたが、質問として『学会名称』につき伺いたい。JAPAN Society of Intellectual Production となっているが、此のIPは知の生産ということになる。産学連携・異種異質連携による知の生産は大事な段階だが、その後段に生産された知を活かす段階が無いと片手落ちだと思うが、その点はどう考えて落ち着いたのか？

（湯本）勿論仰る通りだし知財活用の重要性は十分理解していたが、余りに多くのことを議論してその時点では收拾がつかなくなり、会場にも来られているS先生の提案で連携プロセスの出発点である『知の生産』を先ず掲げておけば取り敢えずは間違いでないということに落ち着いたのが実態である。

英文名は、2代会長・A先生の原案であり、様々な不足を少し補って戴いた想いを記憶している。

【知財学会やベンチャー学会、研究技術計画学会もある中で）本学会の位置づけを考える

と本質としては、(連携・融合に重点を置くのは) 間違いではないと思う。】

=====

B 伊藤正実 = (発表用資料)

<http://www.j-sip.org/pdf/03ito.pdf>

質問・コメント：内島典子 『産学連携右肩上がりの時代』

※上記 URL より資料をご覧いただけない場合は、以下のサイトよりご覧ください。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

本学会を産み出した“地域共同研究センター”への逆風が始まっていた時代だった。
その限界を考え、まずは会員数の倍増に努力した。

学会運営安定化のため事務局運営を外部一括委託に切替えた。

- ① 評議員制度の創設 (過去の理事経験者の組織化 (2009 年度～))
- ② 秋季シンポジウムの再開 2009 年度から再開
- ③ 関連省庁との関係の改善 文部科学省の後援名義等を復活
- ④ 産学連携入門改訂版の発行
- ⑤ 大学向け安全保障貿易管理のガイドラインの策定
- ⑥ 輸出管理 DAY FOR ACADEMIA (EFA) の開催
- ⑦ 科学研究費補助金に新たな産学連携の区分設定要望 (日本学術振興会)
- ⑧ 大学の安全保障貿易管理に関する包括的要望書 (経済産業省)
- ⑨ 組織化委員会の設立と実施
- ⑩ 韓国産学協力学会との MOU 締結
- ⑪ お茶の水コラボレーションセミナー実施 等々を会長時代に行った。

(コメント・内島典子) => 項目が沢山有り個々にコメントすることが難しいので、第 2 部でまとめてコメントしたい。

※※以上、本学会高知大会・設立 20 周年記念オーガナイズドセッションにつきご報告でした※※

※学会誌次号は年末以降の発刊予定です。(電子出版)

※関係資料は別途学会 HP にまとめて掲載しています。

http://www.j-sip.org/os_kiroku.html

当メールニュースではイベントのお知らせや公募情報等、
産学連携に関する情報をお流しいたします。

会員の皆様への情報の配信をご希望の方は、

産学連携学会事務局 (j-sangaku@j-sip.org) までご連絡ください。

バックナンバー : http://www.j-sip.org/mail_news.php